

名作再読、拾い読み (21)

『欲望という名の電車』 ("A streetcar named Desire") 小澤 文彦

前回に引き続き、今回もテネシー・ウィリアムズの作品を取り上げますが、甘く悲しい幻想的な美に彩られた『ガラスの動物園』とは対照的に、今回の『欲望という名の電車』は、真実と虚偽、富裕と貧困、差別と平等、教養と野蛮、生と死など様々な要素が激しくぶつかり合う愛と暴力の凄まじい作品です。

ニュー・オーリアンズの貧民街フレンチ・クォーターに場違いなほどおしゃれな服装のブランチが登場します。『『欲望』という名の電車に乗って、「墓場」という電車に乗りかえて、六つ目の角でおりるように言われたのだけどー「極楽」というところで。』と言いながら、妹のステラが夫のスタンリーと一緒に住んでいる家を探し当てたのに、余りにもひどい家なので信じられないといった面持ちでたたずんでいます。家主のユーニスがブランチを家の中に入れて、ステラを呼びに行ってくれました。ブランチは、長年会っていないかったステラと嬉しい再会を果たしますが、連絡なしに突然やって来たのは、高校の校長が神経が参っているブランチの様子に気が付いて、春学期の途中だけれども暫く休むように勧めてくれたからだと言います。そして、ステラの家に分逗留させて欲しいと頼み、その後、興奮しながら自分たちが裕福に育った屋敷と農園を手放してしまったことを打ち明けます。両親や親類の人たちが次々と亡くなり、病気や葬式の費用を捻出する必要があったからだという説明を聞いて、ステラは茫然とするばかりでした。

帰宅したスタンリーは遠慮の無い性格なので、汗をかいたシャツを着替えるためにブランチの前でも平気で裸になります。また、ドアを開閉する際には必ずボタンと大きな音をたて、台の上に物を置く時にもドサッと乱暴な音を出さずにはいられない無神経な人間です。スタンリーのこのようながさつな動作や下品な言葉遣いが、ブランチには耐えられません。

スタンリーは、無一文になったというブランチが豪華な衣服や高価なアクセサリーのぎっしり詰まったトランクを持っていることに不審を

抱き、彼女の言葉をそのまま信用することができません。法的な書類を出させて確認します。また、ブランチの住んでいたローレルへよく商用で出かける人に、彼女のことを調べてもらいます。

数ヶ月後、驚くべき事実が報告されました。ブランチは屋敷を失ったあとフラミンゴという三流ホテルに住んでいたのですが、彼女の娼婦同然の行動が余りにもひどいのでホテルから追い出されたというのです。また、高校では17歳の少年を誘惑して、市から退去命令が出されていたことが判明しました。

南部の裕福な家庭で上品に育った美しいブランチが、次々と家族が死んでいく不幸に見舞われて財産を失い、その後は自堕落な生活に陥ってローレルから追放され、妹夫婦の家へ転がり込むのですが、スタンリーによって真実を暴かれて逃げ場を失った以上、彼女は精神的に破綻して狂気と幻想の世界に生きるしかありません。夫に自殺され、家族を失い、財産を失い、故郷を失ったブランチの姿は、滅びゆく美の最後の輝きであり、癒し難い悲しみを私達の心に突きつけてきます。

ブランチを追い詰めたスタンリーは単なる暴力的な加害者ではありません。ブランチが来るまでは、貧しくても楽しく過ごしていたスタンリーが、彼女に下品だ、けだものだといって軽蔑され、夫婦の寝室を彼女に覗かれるというプライバシーの侵害を受けながら、我慢を強いられていた点で、彼は被害者でした。スタンリーの性的な魅力が、ブランチにとっては狂う切っ掛けであっても、ステラにとっては生きていく救いであることを見逃すことはできません。

参考文献

1. Tennessee Williams "A streetcar named Desire" (New Directions, c1947)
2. T・ウィリアムズ著、小田島雄志訳『欲望という名の電車』(新潮社、1988)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)